

らい 来ぶらり 16

ごはんを食べるように

—本を読むということ—

事務長 佐野 眞

本を読むにはなぜか「山手線」がいい。たえず人が入れかわり、適度なざわめきがある。人の気配のないところだと、どうも落ち着かないたちだからであろう。それに「読書」といえるような「正統的な」態度で、本を読んだことがほとんどないからかも知れない。

ずいぶん本を読んできたな、という自負はないでもないが、何の脈絡もなく、好奇心にまかせて本を手にしてきたので、職業上読まねばならぬ、といって読むのはほんとうにつらい。それは読書というよりは調べものというのだろう。私は司書になりたいと思って何とか司書になったので、職業上とはいっても、好きで読んでいるときが多いのは、幸せというほかはない。

本をあまり読まない人のきまり文句は「ひまがない！」であろう。だが「ひま」は何とかひねり出すものである。そして「趣味は読書です」という人の読書を、あまり信用しないのは、私にとって本を読むということが、ごはんを食べることのように思えるからである。おなかですくから食べるのであって、ひまだからごはんを食べるわけではない。趣味で食べるものでもない。栄養を考えるべし、というのも正論だが、食べなければいけないといって食べるのはやはり味気ないものだ。ごはんは茶の間や食堂で食べるように、本も書齋で読

むものようだが、私には書齋がない。だからあちこちら、読みたいときに、たとえ5分しかなくても、どこでも読む。つまみ食いをする。行儀の悪いことといったらない。

私はただ本に触っていることが好きなのかかも知れない。ただ活字を追っていることが好きなのだだけの活字中毒なのかかも知れない。20代前半にサルトルに明け暮れた日々があった。その延長でヘーゲルの『精神現象学』に食らいついた覚えがある。今思えば何ひとつ読めてはいなかったはずなのに、夢中で活字を追いつけた。そして今何も残っていない。本を読むことはそれでもよいのだと思う。そのころは本を読む動機にやや不純なものがあった。いわば知的スノビズムというのがあって、読んだことのない書名や人名が、仲間の



口からさり気なくとび出したりすると、私は内心あわてた。晩くまで青臭い議論に酔うことができた時代の名残が、喫茶店の片隅などにまだ少しはあった。

感傷はともかくとして、本を読むことは極めて個人的な営みだから、人に語ってみても、どうしても伝わらないことが多い。人の数だけ読書論があるはずだと思う。人の数だけ方法論があるに違いない。私のはこうだ——
「本読みはいつでもどこでもちよつとでも」

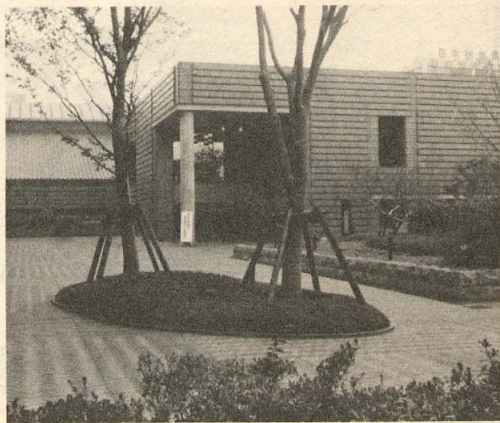


国立国会図書館 新館

本館入り口を左手に見て進むと、昨年9月にオープンした新館の入り口が目に入ります。私たちが利用できるのは4階建ての地上部分で、本館とは各階の通路で結ばれています。このほか、地下の部分は8階建ての書庫になっているそうです。

ロッカーに荷物を入れ、今までどおり入館証を受け取って中に入ります。本館と同様、入り口は2階となっていて、正面は1階からの吹き抜けです。左に進むと、雑誌目録ホールとレファレンスコーナー、その右手奥には雑誌の出納カウンターと閲覧室があります。

日ごろ、私たちがお世話になるコピーの受付は1階。大きなタピストリーのかかった吹き抜けの階段を降りて行きます。ここには落ち着いた雰囲気のレストランもあり、一杯のコーヒーが、資料との格闘で興奮した気持ちを静めてくれます。「官庁・国際機関資料室」も、このフロアです。このほか、3階には「科学技術資料室」、4階には「新聞



機能的デザインが映える新館

閲覧室」がそれぞれあります。

ところで新館オープンに合わせて導入される予定だった磁気カードを使った「入退館管理システム」は、試験結果が思わしくなかったため、今のところ「一般研究室」利用者だけに使われています。フル稼働するようになれば、随分便利になるのですが。

ともあれ、新館のオープンとは、今までの国会図書館のイメージを大きく変えたと言えるでしょう。雑誌資料を中心とする蔵書は、本館との機能分担を可能とし、落ち着いた資料検索が出来るようになりました。ゆったりとしたスペースや工夫された内装が、暖かく親しみやすい図書館の雰囲気を作り出していました。(政治学科4年 岩瀬智久)

新年だから「夢」の話をしませう。一富士、二鷹、三茄子は初夢に出てくると縁起が良いとされている。これは徳川家康が駿河にいたころいわれた言葉で、一番高いのが富士山、二番目が愛鷹山、三番目は当時値段の高かった茄子であったという。

僕の場合、そういう縁起の良い夢をみたことはないが、お金を拾う夢ならみたことがある。母校の小学校の正門で小銭をたくさん拾う夢である。花しい夢だが、今でも小銭の拾い物には縁があるので忘れられずにいる。かけから落ちる夢をみたことがあった。たいていは落ちて行く途中でハッとして目が覚めた。しかし半年位前の夢では、ついに下まで落ちたのでよく覚えている。落下の痛みはなかったが、その後で

枕の下の「夢」

山の斜面をズルズル下へ滑って行く途中でまた目が覚めてしまった。その先はどうなっているのだろう。

江戸時代にはまた、宝船の絵を枕の下に入れて良い夢をみようとする風習があった。そのための宝船売りもいたという。一種の暗示であろうか。

僕にもこんな経験がある。中学時代に好きな女の子の写真を枕の下に入れて寝たことがあった。朝、違う夢をみてがっかりした僕は枕の下から写真を取り出した。すると急に体中に恥ずかしさがこみあげて来た。伏し目がちに見た写真の顔は頭の重みでつぶれていた。その笑っているのか怒っているのかわからない表情は、さらに僕を滅入らせた。

(法経図書室 石井博幸)

『幻の第6巻の草稿があった—江戸時代後期に来日してわが国の蘭学に大きな影響を与えたドイツ人医師、フォン・シーボルト(1796—1866)の有名な『日本動物誌』は全5巻ということになっているが、「幻の第6巻」に収められるはずだった草稿や図版が存在し、オランダに保存されていることが、山口隆男熊本大学理学部助教授らの調査でこのほど初めて確認された—後略』という記事が目飛び込んできた(毎日新聞61.10.14)。

早速わが館の所蔵を調べると、原題：Fauna japonica…が貴重書として所蔵されている。

本書はオランダ東印度総督の命をうけて、日本で収集した動物について記述したもので、1833年から1850年にかけて、オランダのライデンで出版された。

せきつい動物部(3分冊)はテンミンクとシ

シーボルト『日本動物誌』



ユレーゲルの編著でフランス語で、無せきつい動物部はハーンの編著でラテン語で書かれており、学習院所蔵のものは全5巻が4分冊に製本されている。内容は次のようである。

- (1)Mammalia (ほ乳類編) Reptilia (は虫類編) (2)Aves (鳥類編) (3)Pisces (魚類編) (4)Crustacea (甲殻類編)

この大著は世界の学者に、日本にどんな動物が生息するかを紹介し、特に魚類については日本海産のものと地中海産のものとの間に、密接な関係があることを示すなど、動物分布学上に大きな功

績を残したものの、一部学者から「動物誌としては未完」と指摘されていた。冒頭に掲げた第6巻の研究が期待される。学術的なことはともあれ、ち密で素晴らしい彩色図版を見るだけでも楽しいものである。

(洋書係 千村英子)

カウンター体験話

昨年の2月から運用課のお手伝いをしています。できれば将来、どこかの図書館員になりたいくて、見習いのつもりで始めたのがこの仕事です。机の上で図書館を勉強したことはあっても、実際に内側をのぞくのは初めてのことでした。

図書館というと、静か、固い、重い、暗いイメージはありませんか。でも、壁の向うの事務室や書庫は、30人を越すと、25万冊もの本で、ワイワイガヤガヤ、とてもにぎやかで家庭的な雰囲気です。

職員さんの中には、コピーを美しく製本してしまふ人あり、童話・小説を書く人ありで、怖そうにみえた職員さんのイメージも180度変わってし

まいました。

書庫は4階建ての建物を6層に使っているので、2階(3層)で受け付けた本の出し入れは、もうひたすら足が頼りの階段昇降運動です。初めのころは足枕をして寝たけどもう平気。古い写本や研究書のあいだには『サスケ』他数冊の漫画本もあって、書庫も意外な面をみせてくれます。

図書館の人間らしさが一番よくみえるのはカウンターかもしれません。どうぞお気軽に声をかけて下さいね。疲れていても誠実で、悲しくてもあたたかく、必ずお役に立ちたいと考えている人ばかりなんですよ。

(国文学科4年 生沼伊津美)

『雑誌記事索引 人文・社会編 累積索引版』第6期(1980—1984年)分が完結。全17冊。表紙は緑色。学術雑誌・大学紀要などから、41万余の文献を収録。雑誌論文・記事を探すのに便利。参考室にあります。

参考室あれこれ

「上智大学図書館へ行きたいので紹介状を書いてください」

「上智大学に資料があるか確認済みですか」

こうした会話を1日に何回かします。紹介状は紹介先の図書館にみたい資料が確かにあると確認した上で発行することになっています。

「いえ、確かめていません。明治9年ごろに米国聖書会社が編集した新約聖書がみたいのです。上智大学ならあるのではないかと思います」

まず、自分の大学にあるかどうか調べましょう。この場合、明治時代の文献ですから、『学習院図書館和漢図書目録』(昭和5年発行)の冊子目録をみてみました。『和訳訳照新約全書』(明治

13年 米国聖書会社発行)がみつかりました。『漢訳新約全書』(明治15年 同発行)もありました。古い資料の場合、洋書だったら『Catalogue of European book in the Gakushuin Library 1926』という書名の冊子目録があります。どちらも旧学習院時代の蔵書目録です。

調べてもないときは、他大学の所蔵を調べ紹介状を書きます。昨年は555件もの紹介状を出しました。その内訳は、早稲田大学167件、東京大学128件、慶応大学39件と続きます。逆に紹介状の受付件数をみると、早稲田大学7件、東京大学4件、慶応大学にいたってはたった1件でした。数字の上からは、圧倒的に利用させていただいているわけです。

(運用係 甲斐静子)

地下生活者のタメイ記

言うまでもなく、大学図書館には地下室など存在しないのだけれど、我が図書館は、メイン・カウンターをはじめ、参考室、事務室などの中枢部分がすべて2階フロアに集中しており、そこで2年程過ごした者にとっては、1階開架室は何となく“地下室”もしくは“離れ島”的イメージが強いのだ。しかもここは、日中でも曇りの日などは外光が届かないし、高い天井が災いして手元が暗い。外気を入れるにも、窓は書棚にふさがれている。それでも、春先から夏場にかけては、まだ良かった。時々心地良い微風がロビーから吹き込み、強烈な冷房が、コンクリートの地肌を程良く冷やしたものだ。ところが、晩秋から冬になると、微風は寒風に変わり、暖房は足元の電気ストーブだけになったからたまらない。追い打ちをかけるように、1階では1度ひいた風邪はひと冬なおらないのだ、代々の担当者は「痔」に悩まされてきたのだ、恐ろしい話を耳にするに及んで、笑顔が消えた。さっそく座ぶとんを調達し、ホカロンを尻に敷いたら、などと真顔で話し始めている。今まさに冬の真っただ中。どうかみなさん、開架室カウンターで男2人、浮かぬ顔を並べていたからといって、アウレミの目で見ないでください。ひとに言えぬ“悩み”に苦しんでいるかも知れないので。

(運用係 中山高二)

お知らせ

●返却期限、忘れていませんか？

冬休みの長期貸出を受けた本の返却期限は、1月12日(月)から21日(水)までの間です(借りた日によって異なります)。学年末試験の準備で忙しいからといって、返却日に遅れないよう、利用証の日付を確認しておいてください。

●4大学間の入庫利用が実現！

昨年の11月から、学習院、成城、成蹊、武蔵の4大学間で、教職員と院生に限り、書庫内での図書館の閲覧ができるようになりました。申し込みは2階カウンターでどうぞ。

●おわびと訂正

第15号「第52回IFLA東京大会に参加して」の記事中、プリストルはブライトンの誤りでした。

来ぶらり No.16 1987年1月1日発行

発行責任者：森永 毅彦 編集委員：中野里美 中山高二

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区日白1-5-1 ☎(986)0221